

考古学と現代

安藤 信策

1. はじめに

近年の古代史ブームの結果、遺跡の調査も一定の社会的評価を得てきているが、「一片の土器を掘り出すのにあんな手間ひまをかけて、いったい何の役に立つのだろうか?」と言う素朴な疑問を一般の多くの人々は抱いているに違いない。とりわけ遺跡を壊して開発を進めることを仕事とする人々にとっては、これは真剣味を帯びた問いになってくる。遺跡の調査は、そして考古学は現代社会にどのような寄与ができるのか。遺跡の調査に係わりを持つ者として何らかの答えを出したいのだが、十分な答えが出せず、結局、文化財保護法という法律の力に頼ってしまうのが現実であった。今回も性懲りもなくこの問いに挑戦してみることにした。高山に分け入って山裾を徘徊する結果となるにちがいないが調査の合い間の暇つぶしにお読みいただき、何か参考となる点があれば幸いである。

2. 考古学と現代の対立

一つの常識として考古学が提示する遺跡・遺物と現代社会の状況とは対立的な概念である。とりわけ考古学の基礎となる遺跡の調査が、変転の激しい現代社会のただ中で行われているために、この対立は鮮明となる。

ビルの谷間で都市開発のために、山間に大規模な団地を造成するために、あるいは高速道路や新幹線の建設のために伝統的な故郷の景観が変貌していく、そのような場に立ち会い、遺跡の調査を担当しているのが私達の仕事である。ところが現代社会そのものを研究対象とする社会学や現代史学等と異なり、現代社会のただ中であっても発掘調査現場では、古墳時代や弥生時代の遺跡を甦らせることに専念しているために、現場を訪れた人々はちょうど木戸をくぐって芝居小屋に入るように、現代とは異なった時間の中に誘い込まれる。ある地域の一定の小空間にすぎないけれども、発掘現場ではその空間に刻まれた人間生活の痕跡をたどる過去への旅が行われている。遺跡における発見はしばしば新聞紙面に大きく取り上げられる。しかし紙面のさまざまな出来事と遺跡の属する時間との落差は非常に大きく、現代の中にいわば時間的な落とし穴を作っているかのようである。マスコミでの取り上げ方の中では「古代のロマン」という言葉が最も多く用いられることに注目したい。

一般の人々はこの落とし穴に落ち込んで過去の世界をのぞき見ることに、すなわち発掘作業というタイムマシンに乗って過去への旅を行うことに大きなロマンを感じていると言えるのである。そして発掘に関わっている私達自身が誰よりも、多くの労苦の果てにあるこの過去への旅の楽しさを味わっている者である。

遺跡・遺物の調査を考古学に高めるには多くの学術的手続きと研究が必要であることを前提とした上で、発掘調査と考古学とをイコールで結んで述べてみたい。

考古学と現代社会とは多くの場合、非常に断絶した対立的関係にあるとも考えられる。考古学は現代社会の変貌にまさしく身近に立会いながら、そこに一つの芝居小屋を建て、自らが安住するばかりでなく、そこを訪れる人々をも閉じ込めているのではないか。小屋の中には現代とは異なった時間が流れている。遺跡の調査に従事する人々は一種浮き世離れた状態になり、周囲からも浮き世離れた仕事と見られがちである。そして一般的には遺跡の意義はロマンという言葉に要約されてしまう。romantic の訳語は空想的な、夢想的な、实际的でないとなっており、ノヴァーリス、バイロン、シェリー等の詩人を生みだした19世紀ロマン主義は空想的で現実逃避の傾向の強い文芸思潮であったと言われる。発掘現場においても、その成果を展示する博物館、資料館においても、ロマンの名のもとに人々を現実から逃避させる、一種の芝居小屋を架構してはいないだろうか。

ところで発掘調査や保存の必要性を説く際には、ジャーナリズムがしばしば大きく取り上げる遺跡発掘の記事は、私達の説得の有力な味方となってくれることも事実である。私達には全ての遺跡が重要であるという立場があるが、ジャーナリズムの場合は、最古とか唯一とか最大とかいった夢をはぐくむ事例が大きく扱われる傾向があり、そこに現代の歴史的事象との関連がきわめて乏しい、ロマン主義が現われていると言えよう。

たしかに調査現場という芝居小屋を訪れ、調査担当者の演出によって、遺跡や遺物が演じてくれる歴史ドラマを見ることは、感銘があり、楽しさがあり、人生の意味を考える上で少なからぬ意味を持っていると思われる。

また発掘者、見学者が去った遺跡には、どこか寺院にも似た静けさと荘厳さが漂っている。そこは多くの場合、死者達の眠れる場所であり、死者達の思いのこもった土地である。私達は古代人の生活の素朴さ、苛酷さ、ある場合には悲惨さに心を打たれ、現在の私達の歴史的位置付けを確認し、人間について多くのことを学ぶのである。

しかし私達はロマン主義に安住し、現代と断絶したままで自らの研究を進めてよいだろうか。歴史学の意義は過去の研究によって現在を正しく理解し、未来を展望することであるとも言われている。そうした歴史学の一部にたずさわる私達がもし過去の探究と復元にのみ埋没し、現代社会の趨勢に無関心であるとしたら、そのひたすら過去に向かって歩い

ている姿には、ギターを持った渡り鳥といった一抹の哀愁が漂ってはいないだろうか。たとえ過去が次々とその隠れた真相を私達に見せてくれ、知られていなかった歴史的事実を復元することができたとしても、私達は復元した過去のイメージの中に暮らすことはできない。目覚めてみればややうら淋しい現場事務所というのが私達の日常の現実であろう。発掘現場や博物館を訪れ、さまざまな感銘を受けた人々もやがて自らの現実の中へ帰っていくのである。

私達の課題は、私達を取り巻く現代社会の状況を直視することから、私達の一つ一つの仕事と取り組むことではないかと考えられる。

3. 現代社会の素描から

現代社会の状況について、井の中に居る素人の立場からいくつかの素描を試みたい。なによりも現代は21世紀まであと15年という歴史的時点にあることを心に刻むべきであろう。私達はその世紀末に生きている20世紀については、やがて多くの専門家によって各分野からの概観がなされるに違いない。景観の奥にひそむ先人達の文化の痕跡に関心を寄せる私達に言えることは、この100年間にいかに地球上の景観が変貌し、したがって多くの遺跡が失われたということであろう。景観の変貌を可能にしたのは高度な科学技術文明の発展であることは言うまでもない。19世紀の科学・技術の発見と発明を基礎として、1903年にはライト兄弟の飛行機が飛び、1905年にはアインシュタインの相対性理論が発表され、1910年にはクーリッジがタングステン電球を発明、1911年にはフォード社が自動車の大量生産を開始している。手元の科学技術史年表のごく一部の項目である。現在は沢山の人工衛星が地球を巡り、天王星の写真が太陽系の彼方から届けられ、都会では高層ビルが不夜城をなして輝き、自動車が蟻の群れのようにうごめいている。巨大なブルドーザーによって数時間のうちに山を削り取ることも可能である。打製石斧とコンピューターを並べてみると文明の到達点を象徴的に表わすことができるだろう。先進国がこのような科学文明におおわれている一方では、発展途上国は先進工業国の産業構造に組み込まれ、生産の不均衡と自然破壊が進行している。飽食社会の裏側では多くの餓死者を出す飢餓地域が広がっていく。また米ソ軍事超大国を軸とした軍拡競争が続いており、核戦争の恐怖の影は私達の目に見えぬ所にうずくまって、狂気の決断がなされるのをじっと待っているといった感があるのが現代の世界である。

私達の日本は西欧文明を巧みに取り入れて高度工業社会の仲間入りをし、経済的繁栄と飽食のさ中にあると言えよう。したがって経済的繁栄の恩恵に浴している私達は、発展途上国の自然破壊や、アフリカの飢餓問題に対しても責任の一端を担っている者である。そ

して今日の日本の物質的繁栄の中にもさまざまなひずみが顕在化してきている。私達に身近な問題をいくつか挙げていくと現代社会の特色がいくらか明らかになると思われる。

1. 自然破壊と故郷の喪失, 2. 大都市化の一方の地方の過疎化, 3. ゴミ問題, 4. 受験競争, いじめに反映されている教育問題, 5. 機械化による管理社会化, 6. 医療中の非人間化, 7. 高齢化社会, 等々。さらに女性差別やさまざまな人権侵害, 障害者への差別も社会に闇と悲哀とをもたらしている。

とりわけて自然破壊は20世紀の科学文明のもたらした最大の問題であり, 先進国ばかりでなく発展途上国をも巻き込んでいる地球規模の問題である。大都市近郊にはゴミの山が築かれ, 工業排水と生活排水によっても川も海も化学物質の汚染を受け, 田畑には農薬が堆積していく。山やまの緑は開発によって減少し, 工場の煤煙その他の為に緑の活気が失われている。私達自身の体内も, 発ガン物質を含む防腐剤や添加物が入った食品のため汚染が進行していく。母乳からダイオキシンが検出されたという報道も, その影響が徐々に現れてきた一例であろう。水俣病, イタイイタイ病などの一連の水銀汚染事件やベトナム戦争下での枯葉剤散布の影響など, 数々の悲惨な実例があるにもかかわらず, 私達は化学汚染や自然破壊の問題を意識の片隅に追いやって生活を続けているのが実情である。自然破壊の問題に顕著なのは, 今日的生活さえ影響がなければ, 将来のことはどうなってもかまわないという, 現代人のエゴイズムであるように思われてならない。

自然破壊と共に, 都市化, 近代工業化による農山漁村の変化は, 民俗の世界を変貌させ, 共同で行う年中行事や祭礼を衰退させた。年長者から子供まで祭りを共同で行うことによる心の連携と, 無意識の内の父なる者, 母なる者から受ける教育の機会は減少し, 私達の生活の背後にある神秘的な存在に心を開くことも乏しくなったのである。いわゆる故郷の喪失と言われる事象である。小泉八雲の「日本瞥見記」, 中勘介の「銀の匙」, 宮本常一の「私のふるさと」等に描かれた珠玉の輝きをもつ故郷の情緒は今は日本のどこからもほとんど失われてしまったと言える。

自然破壊と故郷の喪失は, 子供達の心の成長に大きな影響を与えていると考えられる。山々が荒れ, 川や海が汚染され, 自然の浜が失われると共に, 住環境の都市化, 車で満たされた道路が生まれ, 子供達を住宅の中へテレビと共に閉じ込めてしまった。子供達は仲間同志で野外で遊ぶ楽しみや, 小さな生き物を友とする発見, 優しさとともに厳しい面ざしをもつ自然という偉大な教師を失ったのである。子供達が野外でほとんど遊ばなくなったことは車で往来する人々には有り難いことである。しかしそれによって子供達の心から何が失われたのかを考えてみたい。夕焼け雲に感動し, 輝き始めた星を見付けたことのある子供達がどれだけいるだろうか。子供達が故郷の自然と共に育って, 心に優しさとうる

おいをはぐくんでいくことが出来ないならば、私達がどんな便利な工業社会を築こうとも空しいことなのではあるまいか。生命の尊とさ、人間の尊厳と弱さを知り人間への同情と愛の心を育てることはテレビゲームやパソコンには決してできないのである。

現代社会の問題を考える時、科学文明の進歩によって失われつつある過去の文化的価値が改めて再評価されてくる。故郷、良き意味の共同体、宗教意識、人間性、そしてこれらを包む自然。これらの文化的価値は歴史学、民俗学、文化人類学、哲学、自然科学等の諸学問と同様に、考古学の研究成果の中から発見できるものなのではないか。これらの諸学問と共に考古学は、現代社会に足らざるもの、失われつつあるものを発見し、提供する役割があると考えられる。これは考古学の学問としての役割と言えるが、考古学の視点や価値観もまた現代社会に欠けているものを提示しているのである。対立し断絶しているように見える考古学と現代は、現代を直視することによって現代社会の側から架け橋がさし出されているように思われる。これに対して考古学は歴史学や民俗学等の諸学問と共に自らの調査現場と研究方法とを現代に対して開放していくことが課題となるであろう。

4. 考古学の役割

ここで考え方を展開して考古学と現代、あるいは遺跡と現代社会とは対立概念ではないことを示したい。しばしば対立するのはその視点と価値観であろう。遠く見ず、目先の利益によって動いているかに見える現代社会の視点と功利主義的価値観とが、遺跡の調査や保存の際の関門となる場合が多い。これに対して考古学の提唱する視点や、歴史的価値、文化的価値を重んじる観点とは、まだ十分に現代社会に受け入れられていない。その結果、開発の論理と保存の論理とが対立することとなるのである。

遺跡と現代社会とは対立するものではなく、同一地平の上にあるのだと見るからこそ考古学に特有の視点である。考古学の視点から言えば、1. 現代社会の構造物、生産物も遺跡・遺物に他ならない、2. 地球の時間の軸に文明時間をとると、数万年足らずの時間は全て現代と言える、3. 各民族の文明、文明内の各文化期を同価値と見る、等の理念を提唱できると考えている。これらの理念は一つの広い視野を社会に提供するもので、哲学的意義を持っているとも言える。

これらの諸点から考古学の役割を次のようにまとめることができる。

I 学問としての役割、1. 歴史学の一部としての役割、2. 歴史的環境を保存又は復元する役割、3. 他の分野の学問や芸術に寄与する役割、4. 社会教育に果たす役割、5. 学校教育に果たす役割。

II 哲学的役割、すでに挙げた3点の理念。

なお以上の役割の基盤には、歴史的価値、文化的価値の尊重と民族や時代にかかわらず人間を尊重するという考古学の立場が存在している。

これらの点について概要を述べてみたい。

(1) 歴史学として

考古学は歴史学の一つの分野として研究を行い、より客観的な歴史認識に近づこうとしている。全ての資料が残っているわけではないという点は文献史料と同様だが、掘り方さえ間違えなければ遺構・遺物は嘘を言わないのは、発掘の労苦が大いに報われるところである。発掘の成果＝歴史事実という性格は考古学の力であろう。しかしこの為考古学の歴史認識が事実の羅列にとどまる恐れも出てくるわけである。沈黙している遺構・遺物をして語らせ、古代社会を復元しようとする際には必ず私達の主題が入りこんでいる。したがって私達の主観や視点を磨き、歴史認識を深めた上で解釈することが必要となる。こうして歴史学の諸分野を始めいろいろな歴史研究の成果は相互に補い合って全体像に近づき私達の無知と偏見のゆえの誤った歴史観を正してくれるのである。私達の決断と行動の根底には私達の世界観がある。世界観は自然観、人間観、社会観、歴史観、宗教意識などさまざまな要素によって構成されるから、問題はそれほど簡単ではないが、要約すれば、歴史を学ぶことによって私達の世界観も変わり、すなわち私達自身も変わり、私達が作る歴史も変化していくのである。この意味で歴史研究は複雑な歴史の変化を促す力でもある。

歴史を学んでみると悪人が栄え善人が滅びる場合が多いが、事実が明らかになることは一つの裁きである。世界史は世界審判である。自らも歴史的存在として裁かれる側にある私達は歴史の暗部を襟を正して見つめなければならない。「わたしたちは今は鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。」哲学者でもあった使徒パウロのこの終末論は、私達の今はおぼろげな歴史認識の究極の姿を指し示すものである。

(2) 歴史的環境の保存

歴史的環境の保存は、文化財の歴史的価値を保存すると共に歴史を追体験する場を作ることである。建築史、美術史の側からも、古社寺の保存にとどまらず歴史的街並みや民家、近代建築の保存が提唱されており、点から面へ、文化財の単独保存から入れ物を含めた保存へと概念が広げられている。古墳、住居跡、寺院跡などの遺跡を面的に保存することは、考古学の最も重く関わる課題である。限られた国土の中ではますます困難となる課題であるが、緑地の確保と両立させ、街作りの構想の中へ積極的に組み込むよう、幅広い住民の方の支持を求めていく他はない。歴史的環境の保存と自然環境の保存とは表裏一体のものである。鎮守の森や野の小道や川辺や砂浜などの身近な故郷の風景、そして多くの人々に

感銘を与えた優れた景観もまた、私達の文化をはぐくんだ文化財であるという観点は、今後深められなければならない。

文化財が内包する歴史的価値はあいまいな概念であるが、壊されれば二度と人間の力では作れないという点で、人知を越えた歴史の力が働いている。形象埴輪や古仏の美に心打たれる時、原子力のように数式で表すことのできない歴史力ともいべき力が内包されているのを感じる。この歴史力が、さまざまな分野の人々に理性的にも感性的にも影響を与え続ける源であろう。

(3) 諸学問への寄与

考古学は人間の生活と労働の場そのものをも研究対象としているから、人間と環境を研究する学問、さらには芸術をも含めた広い分野と関連し影響しあっている。文化人類学、民俗学、地理学、地質学、古生物学、植物学、農学、土木工学、冶金学、建築学等々。そして絵画、彫刻、工芸、陶芸、染織、文学、哲学等々。ここでは関連の深さを見渡すにとどめる。ただ考古学の研究成果が広範囲に影響を与える事例、それは科学と宗教の葛藤の事例であるが、キリスト教世界において進化論がもたらした衝撃を例示しておきたい。

(4) 社会教育

人文系、理工系の学問研究は非常に細分化され、多数の専門研究者によって日々深められている結果、私達が学校で学んだ知識は日々古びている。したがって社会教育として位置づけられる学校後の教育、すなわち生涯教育は余暇の増加にともなって今後ますます重要となる。公民館、文化会館、図書館、美術館等と共に博物館・資料館もその一翼を担っている。古代史に対する関心の深さから、歴史学、考古学に期待されるところは大きい。

都会と地方との文化的隔差をなくしていくためにも、小さな資料館が各地にあることが望ましい。調査との両立をはかる上で種々の困難があるが発掘調査現場も一つの「小さな資料館」として位置づけられたらと考える。

また一方、世界の現在を直視すること、また自然保護を少しでも実現する為に、これらの認識の核となるべき現代史博物館、自然史博物館がきわめて乏しいことは社会教育の視野の狭さを生んでいることを付記しておきたい。

(5) 学校教育

浜田青陵がかつて述べたように、博物館は誰もがやさしく考古学を学べる所である。したがって学校教育の中にもっと位置づけられ、生かされてよい。故郷の喪失という側面而言えば、伝統的な祭りや芸能、民俗行事、伝統的手仕事を保存し復元して子供達に体験させることも、博物館・資料館の役割であると考え。また、自然の中に古代村を作って体

験学習や冒険学習ができれば良いと思う。進化論的に言えば、子供時代は原始時代であって、自然と原始人とが最も良き友人となろう。「小さな資料館」である発掘現場も小・中学校の先生方との協力のもとに、時を定めて子供達に開放できたらと希望される。

5. おわりに―考古学の視点と終末論―

遺跡を調査し保存することの意義を一般的に説明するためにはずいぶん遠回りの道をたどらなければならない。まだ素朴な形であるが一つの試論として御寛恕をお願いしたい。

おわりにさきに挙げた考古学的視点について簡単に触れる。

(1) 現代社会も遺跡である。

浜田青陵は『通論考古学』において「考古学は過去人類の物質的遺物に拠り人類の過去を研究するの学なり」と定義し、物質的遺物については次のように述べている。「然らば此の物質的遺物とは如何なる事物を指すかと云ふに、金石土木の類より成れる建築物、其の集団たる市街、彫刻、絵画、各種の工芸品、武器、家具等に至るまで、苟も人類の意識的に製作したる一切の空間的延長を有する物件を網羅するのみならず、其の無意識的に残したる手澤足跡の印影等に至るまで之を包括し、更に人類の飼養せる家畜食用せる動物の遺骸其の排泄物の類をも逸す可きに非ず。」

考古学が対象とする過去を100年前からとするか200年前からとするかは便宜的なものにすぎない。現在は時々刻々に過去という存在の有り方へ変化している。現代社会も時々刻々に過去の物質的遺物に変化しているのであるから、現代社会も遺跡であると言ってさしつかえない。むしろこれは一つの極論であるが、200年先、300年先の未来から見れば現代社会も立派な遺跡となっているに違いない。

(2) 地球時間から云えば縄文時代も現代

地球の歴史は約45億年であると言われる。人間の一生を100年として、45億年を100年の中で考える地球時間の中へあてはめると、 $45\text{億年} : 100\text{年} = x : 1\text{年}$ となり、一日は12万年に当たる。縄文時代と言えども、2時間前の出来事にすぎない。人類の歴史を300万年とする文明時間をとって300万年を100年の中で考えてみればどうか。1年は3万年に当り、長い人間の一生の中で弥生時代の開始も1か月ほど前のこととなる。今の宇宙の歴史は200億年であるとの説がある。地球時間、あるいは文明時間によっても、現代社会を考えてみたい。

(3) 民族と文明の同価値

諸民族の文明を公平な立場で研究するのが考古学である。科学技術が進歩していくと共に、その文明と社会は絶えず発展しているという視点からは、より遅れた文明、より進歩

した文明という価値づけが可能であろう。しかしそれは文明を生み出した人々の価値付けを行うものではない。むしろ考古学は過去のより遅れた文明の中で生きた人々の苦しみを評価し、その中で新しい工夫と発見を次の世代に伝えた人々の栄誉をたたえるものである。高度科学技術社会を生み出したヨーロッパ世界だけに敬意を払うのではなく、諸民族のそれぞれの文明を尊重し公平に見る視点を広げることこそ、世界連邦への道の出発点である。

現代の高度科学技術文明がどこに向かっているのか誰にも確かな展望はできない中で、予言者的人々の終末論が今日ほど真実味をもっている時代はないと言える。核戦争の恐怖を別としても、自然破壊の加速度的進行、100年後には予測される石油やウランの枯渇、人口の増大と食糧危機、これらの問題が収斂し燃え上がるところから、世界が重大な危機に向かって進んでいることは確実であろう。

自然破壊の加速度を計れないだろうか。空が空で、山が山であり、川が川であり、海が海である由故の自然度を計る基準を作ることができれば、近年の50年余の間に、地球全体の自然度は1割程度は失われたのではないだろうか。かつて日本の多くの砂浜にあった鳴き砂が、今は網野町の琴引浜のほか2か所にすぎなくなったと言われる。日本の場合は自然度の喪失は2～3割になるかもしれない。さきの譬えで言えば50年は地球時間の40秒、文明時間の15時間にすぎないのである。

たとえ明日が世界の終わりの日であっても、私は今日りんごの木を植える、という美しい言葉がある。終末が人知を越えた力で起こるならこのように生きたいものである。農家にあっては野菜の取り入れをし、工場では機械を動かし、哲学者は思索し、そして私達は発掘を続ける。しかし終末を来たらせる原因がわかっているなら、私達はそれを阻止する方向へ、いくらか私達の生き方を変えなければならない。それぞれの持ち場で自らの役割を果たしながら、未来の為に幾分かの関心と力を注ぐことが必要である。。考古学にたずさわる私達の場合は過去と未来を往復する二足のワラジをはかなければならない。社会のそれぞれの持ち場を守りながら、未来の人々のために豊かな自然と精神文化と歴史的遺産を残すこと。そのためには世界の国々に視野を広げて、平和ならしめるよう私達の心に向けねばならない。そのような意味で現代は二足のワラジの時代である。

過去という泉は深い。その泉は未来へ向かって湧きいでている。

(安藤信策＝京都府立丹後郷土資料館資料課長)